「夜中に目がさめる」

安本和夫

人生持つべきものはよき師、よき友といわれている。私は大平さんというこよなき友を得て、この上ない幸福者だと常日頃思っていた。それだけに彼の訃報は私の心の灯を消してしまった。ただ悄然として語る言葉もなかった。大平さんとの出会いは今から五十二年前にさかのぼり、ともに高松高商に学んでいた時である。教室がアルファベットの席順であったので、ちょうど私の隣の列の斜め横に大平さんは座っていた。温厚で真面目で勉学に精励する一方、クリスチャンで精神修養も積んでいた。二年生の時だったか、彼は胸を患い一年、休学した。

再会は戦後私が東京に転勤してからであるが、彼はすでに少壮政治家として活躍していた。その時「オレは卒業が一年おくれたために君より友人が倍できたよ」といって笑っていた。

それ以来、私はたびたび訪れ、またゴルフをともにして旧交を暖めてきた。ゴルフはスクラッチで負けたり勝ったり負けたりで、フォームは私の方がよかったと思うが、勝負は少し負けこしだろう。変わっているのは前の組の進行が遅れている場合、決してセカセカせずティーグランドに座って、時には正座して四方山話に花を咲かせていたことである。

「オレは女にもてる。僕の講演会場の前の方の席は婦人で占められているよ」と彼からよく聞かされた。それは老婦人ばかりであろうと私はいい返したものだが、そんな時微笑を浮かべる彼の柔和な顔にはなかなか魅力があった。どんなことをいってもイヤな顔をしない、心の暖かい思いやりのある大平さんであった。

大平さんは幼少の頃から培われた克己の精神を柱として、先憂後楽の立派な人生哲学の持ち主であった。茫洋とした風貌に反し、緻密な物事の考え方にたって熟慮し、四囲の情勢を凝視して断行する人間性を私は肌で感じていた。よく大平は待ちの政治といわれたが、それは決して政略的なものではなかった。政権の座にあってもすべて民意に任すというのが本心で、政治の過度の介入がプラスでないことをわきまえていた。それが逆に、驕りととられたのは心から残念であったであろう。大平さんはつねづね「できる限り自分の奢りや怠慢を戒めつつ他者のために生きる工夫を重ねなければならない」といっていたのである。

豪放磊落の如く見えて、これと全く異なった繊細な神経で心から国を憂い物事をすべて真面目にとらえるのが大平さんであるが、そのことを熟知している私はある時、「私はいやなことがあれば酒をのんでウサ晴しをするけれど、酒ののめない君はそれもできないし困るだろう」といったことがある。その時に返ってきたのは、「夜中に目がさめることがあるんだ」という答えであり、それに私の胸が痛く打たれたことを思い出す。

激動が続いている国際政治経済情勢に加えて、国内における政争による内閣不信任案の通過、衆参同日選挙と大平さんにとっては気の重い、悩み深いことばかりであったろうと思う。

昭和二十七年衆議院議員当選以来、政治家として特に大臣として総理として、国のため世のために偉大な貢献をしてきたその積年の心労が出たものであろう。かえすがえすも残念でならない。

大平さんの葬儀にカーター大統領をはじめ華国鋒首相など世界の友人が続々と参列いただいたことは、日本の将来に意義極めて大きく国民も感動させられた。大平さんも泉下にあって感泣したことであろう。

偉大なる政治家大平さんを亡くした打撃は、私には人一倍大きく痛恨の極みである。今回初出馬して見事当選された女婿森田一さんが、大平さんの遺志を継いで大成されんことを祈る。

（トーメン相談役）